

「まねびの類比 (Analogia Imitationis)」の提唱

キェルケゴールの『キリスト教への修練』(1850年)における
「神=人」の類比 (アナロギア)

八谷俊久

はじめに

キェルケゴールは、——ルターにおける「律法と福音」理解と密接に関連して——、(1) 苦難のキリストへの「まねび」の要請 (キリストにまねばなければならない) と (2) その罪過論的な不可能性 (キリストにまねぶことができない) の弁証法的な緊張関係の中で (3) 「恩恵」によるキリスト者の新しい救済論的な実存可能性 (キリストにまねぶことができる) について論究している。そして苦難のキリスト像における「模範 (Forbillede)」と「和解者 (Forsoner)」の弁証法をもって提唱される「まねびの神学」*1 からキリスト教社会倫理学を構想することが、キェルケゴール研究の新しい課題となるであろう。そこで本稿では、まずキェルケゴールの後期著作活動の代表作『キリスト教への修練』(1850年)*2 におけるキリストの「神=人」関係についての考察から出発し、さらに「類比 (アナロギア)」概念を適用することをもってキリスト教社会倫理学の基礎付けともなるべきキェルケゴールの「まねびの神学」の原理と構造を解明したい。

*1 なお苦難のキリスト像における「模範」と「和解者」のキリスト論やそこから提唱される「まねびの神学」については、Toshihisa Hachiya: *Paradox, Vorbild und Versöhner—S. Kierkegaards Christologie und deren Rezeption in der deutschen Theologie des 20. Jahrhunderts.* Frankfurt am Main 2006. S.171 ff. を参照。

*2 なお『キリスト教への修練』の成立を巡る諸問題 (仮名「アンチ=クリマクス」の位置付けや『死に至る病』(1849年)との関係など) については、Toshihisa Hachiya: A.a.O. S.176 ff. を参照。

Ⅰ 卑賤のキリストにおける「神=人」の「一致」と「矛盾」

(1) 「神=人」としてのキリスト

神の愛の永遠な決断による罪ある人間の救いのために、イエス・キリストは栄光の天上から卑賤の「下僕の姿 (Tjeners Skikkelse)」を纏ってこの世へ下って来た^{*3}。そしてこのキリストは「人類の救世主あるいは救済者」(SV₁ 12. S.2) でありながら、しかし「愛の故に失われた者たちを探すためにまた苦しみ死ぬためにこの世に来たところの卑賤の者」(SV₁ 12. S.2) でもある (cf. SV₁ 12. S.75)。キリストは全てに先立って人間に向けて下される神の愛の永遠な決断の徽章であり、キリストにおいて真理の神と現実の人間が「一致して結び付いている」(SV₁ 12. S.75)。それゆえにアンチ=クリマクスによれば、卑賤のキリストは「神=存在と歴史的・現実的な状況における一人のひと=存在の一致」(SV₁ 12. S.115) としての、いわば「神=人 (Gud-Menneske)」である^{*4}。

神=人には特別な状況が相応しい。その横に立つ一人のひとが神=人であるという特別な状況である。神=人は神と人の一致ではない。神=人は神と一人のひとの一致である。人間が神に似ている、あるいは似ているであろうことは全くの異教である。そうではなく一人のひとが神であることがキリスト教である。そしてこの一人のひとが神=人である (SV₁ 12. S.79)。

^{*3} 「異教においては人間が神を人間にする (人=神)。キリスト教においては神が自己を人間にする (神=人)・・・」(SV₁ 11. S.235)。

なおキェルケゴールにおける神の「啓示」理解については、八谷俊久「生成する神—『哲学的断片』(1844年)におけるキェルケゴールの『啓示』概念の構想」『新キェルケゴール研究 (第6号)』キェルケゴール協会 2008年5頁以下を参照。

^{*4} ここでアンチ=クリマクスは、イエス・キリストにおける(1)「神性」を否定する「エビオス派」と(2)「人性」を軽視する「グノーシス派」の、古代キリスト教教理史のキリスト論的な異端思想との対決の中で、卑賤のキリストの「神=存在 (神であること)」と「人=存在 (人であること)」の「一致」について論及している (SV₁ 4. S.125)。

『キリスト教への修練』第2部の中でアンチ＝クリマクスは、神の愛の永遠な決断の徽章であるキリストにおいて「一致して結び付いている」ところの(A)「神＝存在(神であること)」と(B)「人＝存在(人であること)」の2つの存在様式を、新約聖書(福音書)のキリスト像についての釈義の形式をもって講解している*5。

卑賤のキリストは、「神＝存在と歴史的・現実的な状況における一人のひと＝存在」の完全な「一致」としての「神＝人」である。キリストの歴史において、(A)全ての人間的なものを越えたところの「神＝存在(神であること)」と(B)「苦しみ」において全ての人間と共にある一人のひとである「人＝存在(人であること)」の2つの存在様式は「一致」の存在論的な関係をもって臨在している。そしてアンチ＝クリマクスは、世界史の中の、しかし「世俗史」である世界史とは全く相容れない、いわば「聖なる歴史(den hellige Historie)」(SV₁ 12. S.22, 25. Anm.1, 29, 31, 71 og 203)*6として可視的な卑下の状態における「神＝人」キリストの歴史を理解している*7。新約

*5 『キリスト教への修練』においてキェルケゴールは、(1)アレキサンドリア学派の「上から」のキリスト論的な思惟モデルから出発しながらも(本稿の注3を参照)、アンティオケ学派の「下から」のキリスト論的な思惟モデルを全体の論述の基調としつつ、さらに(2)状態(あるいは様態)論的なキリスト論におけるキリストの「高さ(status exaltationis)」と「低さ(status exinanitionis)」の思惟モデルを縦横に駆使して卑賤のキリスト「神＝存在」と「人＝存在」の「一致」と「矛盾」の関係を究明している。なおキリスト教史における代表的なキリスト論的な思惟モデルについては、八谷俊久『『逆説』から『物語』へ—キェルケゴールにおけるキリスト論的思惟の変貌について』『新キェルケゴール研究(第5号)』キェルケゴール協会2007年13頁を参照。

*6 「キリストにおいて、自分は神であると彼が語ったことも含めて、彼の卑下の状態での生活や放浪について報告するところの、(一般的な意味における歴史とは質的に異なった)聖なる歴史だけがある。彼は歴史によって消化されることのないまた一般的な三段論法へと転換されることのない逆説である」(SV₁ 12. S.28)。

「世俗史」である世界史とは全く相容れないところの「聖なる歴史」としてキリストの歴史(生涯)を理解することは、アンチ＝クリマクス(あるいはキェルケゴール)において「神＝人」キリストの「神性」によるその「人性」の否定や逆にその「神性」の「人性」への解消ではなく、キリストの歴史における「神＝存在」と「人＝存在」の完全な「一致」についての確信を含意していた。

*7 マランツクは「下僕の姿」の神の「卑下」の形態を、(1)神の人間化としての啓示の出来事における「質的な卑下」と(2)「下僕の姿」において苦しむキリストの「量的な卑下」の

聖書（福音書）におけるキリストの生涯は、そこで真理の神と現実の人間が「一致して結び付いている」ところの「聖なる歴史」であり、キリストは「聖なる歴史」の中で「真の神 (vere Deus)」としてまた「真の人 (vere homo)」として生きるのである。

(2) 「矛盾のしるし」としてのキリスト

しかし「神＝存在と歴史的・現実的な状況における一人のひと＝存在」の完全な「一致」としての卑賤のキリストは、同時に「神と人間の無限の質的な差異」(SV₁ 12. S.130. cf. S.70) の関係、即ち (A) 「質の無限の差異によって人＝存在から隔てられた」(SV₁ 12. S.27) ところの「神＝存在 (神であること)」と (B) 「神＝存在との無限の質的な差異」(SV₁ 12. S.119) によって隔てられた「人＝存在 (人であること)」の、2つの存在様式の絶対的な「矛盾 (Modsigelse)」の関係を内包している。

・・・矛盾が、しかも最大の質的な矛盾が神＝存在と一人のひと＝存在の間に存在する。・・・直接的には彼 (=キリスト) は全ての人間のような一人のひと、貧しいただの人間である。しかしそこには、彼は神であるという矛盾がある (SV₁ 12. S.118)。

あるいは

・・・神＝人。彼 (=キリスト) は神である。しかし一人のひとであることを選んだ。・・・神＝存在と一人のひと＝存在の矛盾は、最大で無限の質的な矛盾である。・・・最深の意味での真剣さにおいて、彼は真の神であり、それゆえに最も苦難を被り、神に見捨てられる思いを抱き、そして一瞬も苦しみを逃れることなく内奥には苦しみが

2つに区分している (Gregor Malantschuk: *Dialektik og Eksistens hos Søren Kierkegaard*. København 1968. S.331)。そしてここでは状態 (あるいは様態) 論的なキリスト論におけるキリストの「低さ」の思惟モデル (本稿の注5を参照) に相当する第2の「量的な卑下」の形態が展開されている。

あった (SV₁ 12. S.123)。

「神＝存在と歴史的・現実的な状況における一人のひと＝存在」の完全な「一致」である卑賤のキリストは、しかしまた同時に絶対的な「逆説 (Paradox)」*⁸としての二重の「矛盾」、即ち (1) 直接的にはただ単に卑賤の者として認識されるだけのこの一人のひとが神と全く異ならず、等しく同じ存在でありまた「神の規定に基づいて」語りまた振舞うという「矛盾」と (2) 神と全く異ならず、等しく同じ存在でありまた「神の規定に基づいて」語りまた振舞うこの一人のひとが単なる卑賤の者としてついに十字架の死に至るまで苦しむという「矛盾」の関係を内包している。別言するならば苦難のキリスト像において、(1)「真の人」が「真の神」であることと (2)「真の神」が「真の人」であることの、「神＝存在」と「人＝存在」の2つの存在様式の存在論的な関係は「最大で無限の質的な矛盾」として現前するのである。

ここで「神＝存在と歴史的・現実的な状況における一人のひと＝存在」の「一致」としての「神＝人」キリストは、「直接的には伝達され得ない」(SV₁ 12. S.119)*⁹あるいは卑賤の「下僕の姿」においてただ「徹底的な認識不可性」(SV₁ 12. S.119)*¹⁰または「最深のインコグニトー」(SV₁ 12. S.119 og 123)*¹¹として伝達されるだけである。何故なら「聖なる歴史」であるキリストの歴史において (A)「神＝存在」と (B)「人＝存在」の2つの存在様式は、人間による直接的な伝達を全く不可能とするような絶対的な「矛盾」の関係を内包しつつ臨在するからである*¹²。それゆえに「神＝人」キリスト

*⁸ 「神＝人は逆説、絶対的に逆説である。従って悟性がある前でも立ち尽くすことは全く自明である」(SV₁ 12. S.80)。

*⁹ 「神＝人として彼 (=キリスト) は、全ての人間と質的に異なっている。それゆえに彼は直接的な伝達を拒否する・・・」(SV₁ 12. S.132)。

*¹⁰ 「・・・認識不可性とは、本質的であるものが外見によるものではないことである」(SV₁ 12. S.124)。

*¹¹ 「インコグニトーであることは、永遠にキリストの自由な決断であった」(SV₁ 12. S.120)。それゆえにインコグニトーとしての卑賤の「下僕の姿」において、神は「顕れる神 (Deus revelatus)」であると同時にしかしまだ「隠れる神 (Deus absconditus)」でもある。

*¹² 「・・・ここに、直接的な伝達を直接的ではない伝達にする、即ち直接的な伝達を不可能にする矛盾がある」(SV₁ 12. S.124)。

は、アンチ＝クリマクスによれば絶対的な「矛盾」の現存を表象するところの「一つのしるし」*13、即ち「自らの内に矛盾を包摂したしるし」(SV₁ 12. S.117)あるいは「関係付けの内に矛盾を包摂したしるし」(SV₁ 12. S.117)、さらに要約して「矛盾のしるし (Modsigelsens Tegn)」(SV₁ 12. S.117. ルカ 2,34 を参照)*14 に他ならない。

(3) 「神＝人」における「自同律」と「矛盾律」の内的な二重の関係規定

以上のように卑賤のキリストは、(A)「神＝存在 (神であること)」と (B)「人＝存在 (人であること)」の2つの存在様式の (1)「一致」の関係と (2)「矛盾」の関係を内包している。全てに先立って人間に向けて下される神の愛の永遠な決断の徴証であるキリストにおいて「神＝存在」と「人＝存在」の2つの存在様式の関係は、いわば「自同律」と「矛盾律」の背反して相応する二重の関係規定を合わせもって成立することとなる。かかるキリストの歴史における「神＝存在」と「人＝存在」の「自同律」と「矛盾律」の背反して相応する二重の関係規定は、——キリスト教信仰の絶えず逢着する謎深い相剋 (アポリア) の本源であるところの——、「カルケドン信条」(451年)の中で告白されるイエス・キリストの「神性」と「人性」の二つの「本性」における「分離せず」と「融合せず」の関係規定に相当すると言えよう。アンチ＝クリマクス (あるいはキェルケゴール) は、かつて古代のカルケドン

*13 ここでアンチ＝クリマクスは「しるし」を、——それ自体としては単なる「杭樺」や「灯火」に過ぎない「海路標識」のように——、直接的な存在である「第一の存在」とは異なった「第二の存在」あるいは「否定された直接性」(SV₁ 12. S.116)として規定している。

*14 「神＝人に関して。彼は一つのしるし、矛盾のしるしである。彼は認識不可性の中にあり、従って全ての直接的な伝達は不可能である」(SV₁ 12. S.125)。

「矛盾のしるし」としてのキリスト理解と関連して、アンチ＝クリマクスは「神＝人」キリストにおける「神＝存在」と「人＝存在」の「一致」の関係を「永遠的なものの形式の元であるいは純粹存在の虚無の象面に現出するかのような神と人間の思弁的な一致」(SV₁ 12. S.115)へと転換してしまう当時のキリスト論に纏わる蒙昧について論及し、そこでヘーゲルのキリスト論を揶揄している (cf. SV₁ 12. S.117)。なおここではアンチ＝クリマクス (あるいはキェルケゴール) のヘーゲル理解の妥当性について議論しない。

会議の神学者たちが信仰告白したものと同一「自同律」と「矛盾律」の背反して相応する二重の関係規定の成立を、新約聖書（福音書）の記者たちが描出するキリスト像の中に見出したのである。

そしてキリストにおける「神＝存在（神であること）」と「人＝存在（人であること）」の「一致」の関係（「自同律」）と「矛盾」の関係（「矛盾律」）の内的な二重の関係規定に基づく類比的な対応関係（「関係の類比（*analogia relationis*）」あるいは「比例の類比（*analogia proportionalitatis*）」^{*15}）をもって、さらにキリスト自身と人間（キリスト者）の関係における「一致」と「矛盾」の二重の関係規定が、以下において導き出される。

II 「神＝人」キリストの類比としてのキリストと人間の関係 — 「信仰」と「つまずき」

卑賤のキリストは、「神＝存在（神であること）」と「人＝存在（人であること）」の2つの存在様式の(1)「一致」の関係（「自同律」）と(2)「矛盾」の関係（「矛盾律」）の背反して相応する二重の関係規定を内包する。そしてキリストにおける「神＝存在」と「人＝存在」の内的な関係規定の類比的な対応関係として、キリストと人間（キリスト者）の関係における二重の関係規定がこれより論述される。(1)「信仰」におけるキリストと人間（「信仰の対象（*Troens Gjenstand*）」と「信仰者」）の和解論的な「一致」の関係^{*16}。(2)「つまずき」におけるキリストと人間（「つまずきのしるし（*Forargelsens Tegn*）」

^{*15} 本稿において適用される「類比（アナロギア）」は、二つの関係規定（例えばまずは「神＝人」キリストにおける内的な二重の関係規定とキリストと人間の二重の関係規定）の間に介在する対応関係を統括するための論理的な概念である。ただし『キリスト教への修練』においてキェルケゴールはこの「類比」の用語を使用していない。『後書』（1846年）では「ソクラテス的な無知」とキリスト教的な「不条理的なもの（背理）」、あるいは「ソクラテス的な内面性」とキリスト教的な「信仰」が類比の関係をもって結び付けられている（SV₁ 7. S.171f.）。なお「類比」概念全般の成立史や諸類型、そのそれぞれの意味内容については、Joachim Track: *Analogie*. In: *TRE*. 2. Berlin - New York 1978. S.625ff. を参照。

^{*16} 「・・・彼（＝キリスト）は、逆説であり信仰の対象であり、ただ信仰のためだけに存在する」（SV₁ 12. S.24）。

と「つまずく者」の罪過論的な「矛盾」の関係。

卑賤のキリストは、人間にとって「信仰の対象」でありしかしまた同時に「つまずきのしるし」である (cf. SV₁ 12. S.2, 22 og 89)。そしてキリストとの関係において、人間は「信仰」か「つまずき」の決断に直面する。そこでは「信仰」の反対は「不信仰」ではなくて「つまずき」だからである。「信仰」と「つまずき」の概念は相互に弁証法的な関係にある^{*17}。キリスト教信仰の建徳において、キリストは「信仰の対象であるためにつまずきのしるしでなければならない」(SV₁ 12. S.94 og 100)。それゆえにキリストと人間の関係は、「神=人」キリストにおける関係規定の類比的な対応関係としての「一致」の関係(「自同律」と「矛盾」の関係(「矛盾律」)の背反して相応する二重の関係規定を合わせもって成立することとなる。

そこで以下においては、キリストにおける「神=存在」と「人=存在」の「一致(関係)」と「矛盾(関係)」の内的な関係規定の類比的な対応関係として、キリストと人間(キリスト者)の関係が(1)「つまずき」から(2)「信仰」への救済論的な順序で究明される。

(1) キリストと人間の「矛盾」としての「つまずき」

卑賤のキリストにおける「神=存在(神であること)」と「人=存在(人であること)」の絶対的な「矛盾」の関係から、まずはキリストと人間(「つまずきのしるし」と「つまずく者」)の「矛盾」の関係が類比的に論述される。本来的に「つまずきは神と人の結合あるいは神=人に関わる」(SV₁ 12. S.79)^{*18}。そして「つまずきのしるし」である「神=人」キリストに向かっ

^{*17} 「人は壊れた器の中に、即ちつまずきの可能性の中に信仰を持つ」(SV₁ 12. S.74)。

^{*18} まず仮名ヨハネス=クリマクスによる『哲学的断片』(1844年)において、キェルケゴールは「つまずき」を神が人間となることの「絶対的な逆説」に衝突する「悟性」の「不幸な愛」(SV₁ 4. S.216)と呼称している。また同じ仮名ヨハネス=クリマクスによる『後書』において、「つまずきの可能性」を(「内面化の弁証性」(SV₁ 7. S.485)を基盤とした「宗教性A」に対して)「時間の中の神」によって規定されたキリスト教に固有な逆説的な宗教性である「宗教性B」(SV₁ 7. S.489)の中の第2の実存象面として論及している(SV₁ 7. S.510)。さらに仮名アンチ=クリマクスによる著作『死に至る病』では、キ

て(1)「高さ」と(2)「低さ」の相反する二重の方向において、人間は「つまずきの可能性 (Forargelsens Mulighed)」に逢着する。即ち(1)まず直接的には単に卑賤の者としてのみ認識されるだけのこの一人のひとが、しかし神と全く異ならず、等しく同じ存在でありまた「神の規定に基づいて」語りまた振舞うという、キリストの「神性」の「高さ」の方向において「つまずきの可能性」(SV₁ 12. S.78 og 96ff.)が、また(2)次に神と全く異ならず、等しく同じ存在でありまた「神の規定に基づいて」語りまた振舞うこの一人が、しかし単なる卑賤の者として十字架の死に至るまで苦しむという、キリストの「人性」の「低さ」の方向において「つまずきの可能性」(SV₁ 12. S.78 og 90ff.)が生じるのである*¹⁹。ここで卑賤のキリストに対する「つまずき」は、(1)「真の人」が「真の神」であることと(2)「真の神」が「真の人」であることの、キリストにおける「神=存在」と「人=存在」の絶対的な「矛盾」の関係から類比的に派生するところの、キリストと人間の「矛盾」としての否定的な関係規定についての聖書的・宗教的な表現であり、それはアンチ＝クリマクスによってさらに「神=人の否定するしるし」(SV₁ 12. S.133)と別言される。

人間には「直接的には伝達され得ない」ところの、卑賤のキリストにおける「神=存在」と「人=存在」の絶対的な「矛盾」の中に、キリストの「苦しみの秘密」(SV₁ 12. S.94)あるいは「苦しみの底無しの深淵」(SV₁ 12. S.100)が横たわっている。そしてそこにキリストと人間の「矛盾」の関係としての、人間のキリストに対する「つまずき」の本源が宿在する。

しかしながら「矛盾のしるし」として直接的な伝達を拒否する「神=人」キリストの「苦しみの秘密」は、キリストにつまずく者に「信仰」の決断を迫る「弁証法的な規定」(SV₁ 12. S.131)を示現する*²⁰。「神=人、矛盾

リストと人間の「矛盾」としての否定的な関係規定である「つまずき」を、「神=人」キリストによってもたらされる「罪のゆるしについて絶望する罪」(SV₁ 11. S.225)として規定している。

*¹⁹ キリストの「高さ」と「低さ」の状態(あるいは様態)については、本稿の注5を参照。

*²⁰ 「神=人は信仰を要請し、また信仰を要請するために直接的な伝達を拒否しなければな

のしるしは直接的な伝達を拒否する、——そして信仰を要求する」(SV₁ 12. S.131)。かくして直接的な伝達を拒否する「矛盾のしるし」は、それに直面する人間にとっての「つまずきの可能性」であると同時にまた「信仰」の起点ともなる。

(2) キリストと人間の「一致」としての「信仰」

先述のようにキリストと人間の「矛盾」である卑賤のキリストに対する「つまずき」は、キリストにおける「神=存在(神であること)」と「人=存在(人であること)」の絶対的な「矛盾」の関係の類比として理解された。それに対してキリストにおける「神=存在」と「人=存在」の完全な「一致」と類比的に呼応しつつ、キリストと人間の「一致」の関係が「信仰」となって発現する。

「信仰は最高の意味で神=人に関わる」(SV₁ 12. S.131)。「信仰」は、十字架に付けられた卑賤の者が神でありまたこの世の救済者であるという、キリストにおける「神=存在」と「人=存在」の和解論的な「一致」を基底として成立する*²¹。卑賤のキリストが「神=存在」と「人=存在」の絶対的な「矛盾」の関係において両者の完全な「一致」の関係を顕現するように、「信仰」は卑賤のキリストに対する「つまずき」であるキリストと人間の「矛盾」においてキリストとの和解論的な「一致」を形成する。「信仰」だけが、「神=人」キリストと人間の間「横たわる深淵」(SV₁ 12. S.130)である「つまずきの可能性」を越えることができる。それゆえに「信仰」は、——先の「つまずき」とは反対に——、キリストにおける「神=存在」と「人=存在」の「一致」の関係から類比的に派生するところの、キリストと人間の「一致」としての肯定的な関係規定についての聖書的・宗教的な表現であるところの、いわば「神=人の肯定するしるし」となる。

らない」(SV₁ 12. S.132)。

*²¹ 「信仰とは、キリストにおける神的なものとの人的なものを合わせて信じることである」(SV₁ 11. S.69)。

そしてアンチ＝クリマクスは、キリスト者となるための「信仰の条件」を卑賤のキリストとの「同時性(同時的となること)」(SV₁ 12. S.1)と見做している。即ち「信仰」とは、卑賤のキリストとの「同時性の状況(Samtidighedens Situation)」(SV₁ 12. S.34, 39, 60, 61 og 62)^{*22}においてキリスト者となることに他ならない。「・・・同時性の状況をもって始めること以外に、神＝人への関係は決して可能とはならない」(SV₁ 12. S.79)。「聖なる歴史」であるキリストの生涯との「同時性の状況」において信仰者は、キリストにおける「神＝存在(神であること)」と「人＝存在(人であること)」の「一致」の関係から類比的に派生するところの、キリストと人間の「一致」としての肯定的な関係規定を不断に反復する。それゆえに「同時性」概念は、卑賤のキリストと直接的に同時代的である者と直接的に非同時代的である者の間にある「1800年」(SV₁ 12. S.1)の歴史的な隔たりと関わるだけではなく、「神と人間の無限の質的な差異」にも関わるものとなる^{*23}。「同時性は、神が卑賤の者あるいは苦しむ神の下僕の姿において近づいて来られるという、絶対的な背理の現在化を意味する」(ドイザー)^{*24}。「信仰」において卑賤のキリストと同時的となることは、キリストにおける「神＝存在」と「人＝存在」の「一致」の関係から類比的に派生するところの、キリストと人間の「一致」としての肯定的な関係規定の不断の反復を含意している。

(3) 「つまずき」から「信仰」へ — 「同時性の状況」における「まねび」

アンチ＝クリマクスにとって「信仰」の反対は「不信仰」ではなく「つまずき」である。「同時性の状況」において「信仰」と「つまずき」の概念は相

^{*22} 「絶対的なものとの関係においてただ一つの時間だけがある。現在のなもの。絶対的なものと同時的でない者のためには、それは存在しない。キリストは絶対的なものであるから、彼との関係においてただ一つの状況がある。同時性の状況である。・・・彼が誰であるかは、ただ信仰のために明かされる」(SV₁ 12. S.60)。

^{*23} Cf. Wolfdietrich v. Kloeden: Der Begriff Gleichzeitigkeit in den Philosophischen Brocken. In: *Liber Academiae Kierkegaardensis* 6. København 1986. S.42.

^{*24} Hermann Deuser: ›Einübung im Christentum‹. In: ›Entweder/Oder‹. Frankfurt am Main 1988. S.107.

互に弁証法的な関係にある。「従って同時性は、信仰の条件あるいはつまづくことの条件である」(シュレアー)^{*25}。キリスト教信仰の建徳において、キリストは「信仰の対象であるためにつまづきのしるしでなければならない」。「つまづきの可能性」を通過することなく、「神=人」キリストを信じることはできない^{*26}。それは「神=人」キリストが、まずは「つまづきのしるし」として直接的な伝達を拒否するからである^{*27}。それゆえにキリスト教信仰は「信仰」に先立ってまずは「つまづきの可能性」を認識論的な出発点としていると言えよう。

ところでアンチ=クリマクスは、「つまづきの可能性」の除去によって「信仰」と「つまづき」の緊迫した弁証法を見失ったことにデンマーク国教会の錯誤の温床を見付けた。

もしつまづきの可能性が除去されるならば、キリスト教界において行なわれるように、全てのキリスト教は直接的な伝達となり、またキリスト教は破棄される (SV₁ 12. S.130. cf. 34 og 133f.)。

「つまづきの可能性」を通過することなく、「神=人」キリストを信じることはできない。キリスト教信仰の建徳において、キリストは「信仰の対象であるためにはつまづきのしるしでなければならない」。それゆえにアンチ=クリマクスは、「つまづきの可能性」を除去することによってこの世において延命する「既存のキリスト教界 (den bestaaende Kristenhed)」を、——キリストの真理のために「戦う教会 (den stridende Kirke)」(SV₁ 12. S.193)と区別して——、そこではキリスト教的なものが虚妄なものへと変造されることとなる「勝利した教会 (den triumferende Kirke)」(SV₁ 12. S.193)と呼称したのである。デンマーク国教会において、キリスト教信仰の「逆説は弛

^{*25} Henning Schrøer: Gleichzeitigkeit in Einübung im Christentum. In: *Liber Academiae Kierkegaardensis* 6. S.91.

^{*26} 「信仰においてつまづきの可能性は弁証法的な要素である」(SV₁ 11. S.238)。

^{*27} 「もしつまづきの可能性が存在しないならば、直接的な伝達が存在し、そして神=人は偶像となるであろう。直接的な伝達は異教である」(SV₁ 12. S.133)。

緩し、人は・・・つまずきの可能性について何も知ることなしにキリスト者であった」(SV₁ 12. S.33)。

「・・・信仰を破棄する者は、つまずきの可能性を破棄する」(SV₁ 12. S.133)。それならばキリスト教信仰の真理の回復のために人間は、卑賤のキリストにおける「神=存在(神であること)」と「人=存在(人であること)」の「一致」の関係と「矛盾」の関係の背反する二重の関係規定から類比的に派生するところの、キリストと人間(キリスト者)の「一致」の関係(「信仰」と「矛盾」の関係(「つまずき」)の二重の関係規定を「同時性の状況」の緊張をもって不断に反復しつつ、さらにそれを通して信仰者へと再生されなければならない^{*28}。「もし人間がつまずきの可能性から信仰へと決断を進めるなら、信仰は破棄された事柄としての(つまずきの)可能性の記憶を絶えず内に抱くだけでなく、人間は信仰の全ての新しい行為において常に新しくこの決断を進まなければならないであろう」(ディーム)^{*29}。かくして極めて厳格なキリスト者であるアンチ=クリマクスによれば、「同時性の状況」の緊張関係の中にある「信仰」と「つまずき」はまさしく「全く本来的なキリスト教的な規定」(SV₁ 12. S.78)に帰属することとなる^{*30}。

さて「つまずき」から「信仰」への行路は、卑賤のキリストとの「同時性の状況」においてキリスト者となるあるいはキリスト者であること、即ち「キリストのまねび(imitatio Christi)」として実現される^{*31}。「信仰」をもってキリストと同時的となることの主体的・内面的な決断は、人間(キリスト者)に「まねび」を要請する。そして「つまずき」と「信仰」の二重の関係規定の類比的な反復がもたらすところの、(1)卑賤のキリストとの「同時性の状況」における「まねび」の要請(キリストにまねばなければならない)は、さらにキリストと人間の(2)「矛盾」(キリストにまねぶことができない)と

^{*28} 「・・・異教がキリスト教から区別されるように、キリスト教界においてキリスト者であることは同時性の状況においてキリスト者であることから区別される」(SV₁ 12. S.102)。

^{*29} Hermann Diem: *Die Existenzdialektik von Søren Kierkegaard*. Göttingen 1964. S.75.

^{*30} キェルケゴールは、キリスト者であるための「全ての概念の中で最高のもの」として「同時性」と「つまずきの可能性」、「信仰」の3つの概念を挙げている(Pap. IX A 413)。

^{*31} 「キリスト教は、信仰とまねびである」(Pap. X-3 A 454)。

(3) 「一致」(キリストにまねぶことができる)の弁証法的な緊張関係の中で人間に新しい実存と行為の可能性を開示する。

以上のように、アンチ＝クリマクスにおいて「つまずき」と「信仰」の二重の関係規定の類比的な反復がもたらすところの、「キリストのまねび」の実践的な要請は、——ルターの「律法と福音」理解と密接に関連して——、世俗化した「既存のキリスト教界」の修正的な機能とさらには新しいキリスト教的な実存と行為についての理解の基礎付けと展開の可能性を提示するのである。

III 「まねび」の類比における新しい実存と行為の可能性

(1) キリストと人間の類比における「まねび」

キリストと人間の関係は、「神＝人」キリストにおける関係規定の類比としての「一致」の関係（「信仰」）と「矛盾」の関係（「つまずき」）の背反して相応する二重の関係規定を合わせもって成立する。そしてそこからさらに人間実存における「自己に関係する自己」との本来的な「一致」の自己関係と非本来的な「矛盾」の自己関係^{*32}の二重の関係規定が類比的に派生する。即ち「信仰」と「つまずきの可能性」によって人間実存の内奥には、全てに先立って人間に向けて下される神の愛の永遠な決断の徽章であるキリストの「神＝存在（神であること）」と「人＝存在（人であること）」の「一致（関係）」と「矛盾（関係）」としての内的な二重の関係規定の類比が刻印されている^{*33}。かくしてここに、(1) 全てに先立って人間に向けて下される神の愛

^{*32} 『死に至る病』においてケルケゴールは、人間実存における「自己に関係する自己」(SV₁ 11. S.127 f.)との本来的な「一致」の自己関係から不当に逸脱した非本来的な自己関係の「矛盾」の諸相を「絶望」についての心理学的な分析によって究明している (SV₁ 11. S.154ff.)。

^{*33} 人間実存の内奥に刻印された、キリストにおける「神＝存在」と「人＝存在」の「一致（関係）」と「矛盾（関係）」の内的な二重の関係規定の類比の対応関係が、『死に至る病』ではさらに「総合としての人間」理解によって別言されている。「人間は、無限性と有限性あるいは時間的なものと永遠的なもの、自由と必然性の総合である」(SV₁ 11. S.127)。そしてここで人間実存における「総合」を構成する2つの要素が、(1) 不可同性（「矛盾」）、

の永遠な決断の徽章であるキリストの「神=存在」と「人=存在」の内的な二重の関係規定、(2)キリストと人間の関係における「信仰」と「つまり」の派生的な二重の関係規定、(3)人間実存における自己関係の二重の関係規定の、三層に涉って不可逆的に連鎖した「一致」と「矛盾」の二重の関係規定の類比的な対応関係（「関係の類比」あるいは「比例の類比」）が形成されることとなる。

そして「神=人」キリストとの絶対的な差異（cf. SV₁ 12. S.132）の「矛盾」の関係の元にあつて、キリスト者は「信仰」による「キリストのまねび」をもってキリストにおける「一致」と「矛盾」の二重の関係規定を絶えず類比的に反復することができる。ここで「キリストのまねび」は、「神=人」キリストとの類比的な対応関係の元で「一致」の関係（「自同律」）と「矛盾」の関係（「矛盾律」）の背反して相応する二重の関係規定を合わせもって成立する。

アンチ=クリマクスはキリスト教信仰における「キリストのまねび」を、以下のように要約している。

真にキリスト者であることは、当然ながらキリストであること（それは神冒流である）ではなくて、まねぶ者（Efterfølger）である。・・・彼（=キリスト）にまねぶ者であることは、その生き方が、一人の人間の生き方において可能である限りに、彼の生き方に似ることである（SV₁ 12. S.101）。

卑賤のキリストとの「同時性の状況」においてキリスト者となるあるいはキリスト者であることは、卑賤のキリストにまねぶこと、即ちキリストが生きたように、卑賤のキリストに対して類比的に呼応しつつ生きるという、キリストにおける「一致」と「矛盾」の二重の関係規定を反復することを含意している。それゆえに卑賤のキリストは信仰者にとっての「信仰の対象」であるだけでなく、信仰者をさらにまねぶ者へと善導するところの「同時性

(2) 不可分性（「一致」）、(3) 不可逆性の3つの関係規定をもって成立している。

の状況における範例 (Paradigme) (SV₁ 12. S.102)^{*34} あるいは「模範」^{*35} に他ならない。そしてアンチ＝クリマクスによれば、「模範」としての苦難のキリスト像にまねぶ者だけが「真のキリスト者」(SV₁ 12. S.232) である。かくして「模範」としての苦難のキリスト像から提唱される「まねびの神学」をもって、この世においてキリスト者となるあるいはキリスト者であることのキリスト教信仰の建徳的な要請は、極めて厳格なキリスト者である仮名著者「アンチ＝クリマクス」によって「最高次の理念性まで引き上げられる」(SV₁ 12. S.v, 71 og 139) こととなる。

(2) 「キリストのまねび」におけるキリスト者の「苦しみ」の類比

卑賤のキリストにおける「神＝存在 (神であること)」と「人＝存在 (人であること)」の「一致 (関係)」と「矛盾 (関係)」としての内的な関係規定は、——垂直方向におけるキリストと人間 (個人) の関係規定と並んで——、さらにキリストと人間 (世界あるいは社会) の「一致」と「矛盾」の水平方向において類比的に派生する対応関係の関係規定として反復される。

卑賤のキリストは、「人間社会からの疎外」(SV₁ 12. S.51. cf. S.36) の元にあつた罪人や病人、貧しい者、悲しむ者と共に生きた。キリストは人々を交わりの中へと「招く者」(SV₁ 12. S.22. マタ 11,28ff.) であつた。しかしそれによってキリストは「既存のものと衝突」(SV₁ 12. S.81) し、この世において苦しんだのである^{*36}。人間社会における愛の連帯のためにそして邪悪な世界 (「既存のもの」) との衝突によって、キリストは「苦しみ」を甘受する (cf. SV₁ 12. S.85)。神の愛の決断の徽章であるキリストの天上の栄光の姿は、この世においてはただ卑下にあるものとして示現する^{*37}。それゆえ

^{*34} 「この世におけるキリストの生涯は、キリストと等しくなるようにと私の人生を育成することを求めなければならないところの、範例である」(SV₁ 12. S.102)。

^{*35} 本稿の注1を参照。

^{*36} 「大衆は非真理である。それゆえにキリストは十字架に付けられたのである・・・」(SV₁ 13. S.595)。

^{*37} 「キリスト教は相反するものをいつも並置する。即ち栄光は栄光として直接的に知られるのではなく、逆に卑下や卑賤において、即ち十字架において知られる・・・」(SV₁ 12.

に卑賤のキリストにとってこの世における「苦しみ」は、人間社会との「一致」と「矛盾」の二重の関係規定の徽章に他ならない。

そして卑賤のキリストの人間社会における愛の連帯（「一致」の関係）と邪悪な世界（「既存のもの」との衝突（「矛盾」の関係）は、キリストにまねぶキリスト者によって類比的な仕方において反復される（cf. SV₁ 12. S.103）。真理であるキリストがこの世において苦しんだように、キリスト者もまた真理のためにこの世において苦しまなければならない^{*38}。ここに人間社会における愛の連帯のためにそして邪悪な世界（「既存のもの」との衝突によってキリスト者が甘受する「苦しみ」がある。

キリストのように苦しむことは、人間の邪悪を苦しむことである。何故ならキリスト者としてあるいはキリスト者であることによって、人は善を欲し善のために努めるからである。・・・もし人間がその重荷を耐え忍んで背負おうとキリスト教的に努めるなら、耐え忍ぼうとするために、人々から嘲笑され愚弄されるかもしれない。そのようにキリストは苦しんだのであった。彼（＝キリスト）は真理でありまさしく真理に他ならなかったので、苦しんだのであった（SV₁ 12. S.161）。

「まねび」においてキリスト者は卑賤のキリストの「苦しみ」を反復する。キリストの天上の栄光の姿がこの世においてはただ卑下にあるものとして示現するように、キリスト者であることの祝福はこの世においては「苦しみ」となって授受される^{*39}。キリスト者の目指す天上の高座は、この世における「苦しみ」の卑下である^{*40}。

S.434)。

なおキリスト教信仰における「高さ」と「低さ」の状態（あるいは様態）の思惟モデルについては、本稿の注5を参照。

^{*38} 「・・・それ（＝キリスト教）は、キリスト者は苦しまなければならないこと、キリスト者となるあるいはキリスト者であるために人間は苦しまなければならないことについて語る」（SV₁ 12. S.60）。

^{*39} 「苦しみはこの世における異同の質的な表現である。この異同（苦しみはその表現である）の中に、永遠性への関係、永遠性の意識がある」（Pap. X-4 A 600）。

^{*40} キリストの「低さ」の方向における「本質的なつまずきの可能性」に続く「付論II」に

真のキリスト者の卑下は単なる卑下ではない。それはまさしく高さの投影である。しかしそれは、高さがただ逆に低さと卑下において現出するこの世における投影である。・・・キリスト者であることは最高の高挙であり、しかし同時にこの世の投影においては最低の卑下として現出する (SV₁ 12. S.183)。

キリスト者はキリストのこの世における「苦しみ」にまねぶ。それゆえに卑賤のキリストにまねぶキリスト者にとってこの世における「苦しみ」は、——もはやこれまでのように「真の宗教性」の徽章としての「隠れた内面性」(SV₁ 7. S.412)^{*41} と関わるのではなくて——、人間社会における愛の連帯と邪悪な世界との衝突として表出するところの、人間社会との「一致」と「矛盾」の二重の関係規定の徽章である。

(3) 「まねび」の類比におけるキリスト教社会倫理学の基礎付け

以上のように「キリストのまねび」において、(1) 全てに先立って人間に向けて下される神の愛の永遠な決断の徽章であるキリストの「神＝存在」と

において、さらに類比的に派生するキリスト者の「低さ」の方向においての「つまずきの可能性」について論及されている。「キリスト者となるあるいはキリスト者であることと関連して低さの方向においてのつまずきの可能性、神＝人の低さと卑賤に向かう、先のつまずきの可能性から派生したものに相当するつまずきの可能性」(SV₁ 12. S.107)。

^{*41} キェルケゴールの前期著作活動において「隠れた内面性」は「真の宗教性」の徽章として理解されていたが、後期著作活動では卑賤のキリストの「苦しみ」にまねぶことを見失いすに「勝利した教会」となった「既存のキリスト教界」の錯誤の元凶と見做されている (cf. SV₁ 12. S.196)。キリスト教信仰は、——もはや人間世界から断絶し排他的に孤立した「沈黙」の「苦しみ」(「人間をより偉大なものにするのはもとより秘匿と沈黙である。何故ならそれらは内面性の規定を創出するからである」(SV₁ 3. S.135)) によって練成されるのではなくて——、この世における「まねび」の「苦しみ」となって不断に表出するのである。なおキェルケゴールの伝記的な諸事情によれば、1848年4月のイースター(復活日)の後から、——1838年5月の「語り得ない喜び」(Pap. IIA 228)の神秘的・默示的な体験を遥かに凌ぐ、救済者キリストによる「罪の赦しの信仰」体験と密接に連動して——、それまでの「隠れた内面性」の宗教的な境位からの決定的な突破 (Pap. VIII-1 A 640ff.) が確信され、はたして苦難のキリストに倣い真理のために苦しむ「単独者」としてデンマーク国教会との過酷な戦いへと赴く決意が結ばれたと思われる。

「人=存在」の内的な二重の関係規定、(2) キリストと人間（世界あるいは社会）の関係における派生的な二重の関係規定、(3) 人間（自己）と人間（他者）あるいは人間と社会における関係の二重の関係規定の、三層に涉って不可逆的に連鎖した「一致」と「矛盾」の二重の関係規定の類比的な対応関係（「関係の類比」あるいは「比例の類比」）が形成される。そしてここでは、キリストと人間（世界あるいは社会）の関係を水平方向における類比的な対応関係へと転置した関係規定から、人間と人間あるいは人間と社会の関係規定が、さらに「行為の類比 (analogia operationis)」^{*42}の展開としての、いわば「まねびの類比 (analogia imitationis)」^{*43}をもって社会批判的な視点の元で論述されることとなる。

卑賤のキリストの「苦しみ」において、「単独者（一人のひと）と既存のものの衝突」(SV₁ 12. S.84) あるいは「キリスト教的なものとのこの世的なもの限りのない葛藤」(SV₁ 12. S.105) が露顕する。この世界において真理は決まって「大衆」とは全く相容れないところの「単独者（一人のひと）」^{*44}であり、それゆえに「大衆」によって絶えず「苦しみ」を甘受する運命となる。「『真のキリスト者』は『キリスト教界』において迫害される」(SV₁ 12. S.110)。「単独者（一人のひと）」である人間（キリスト者）と社会の緊迫した関係は、すでに世俗化した「既存のキリスト教界」においてのように、「この世的なものへの直接的な関係」(SV₁ 12. S.106) へと弛緩してはならない。

*42 本稿の注 15 を参照。

*43 ここで提唱される「まねびの類比」は、キリストと人間（世界あるいは社会）の二重の関係規定と人間と人間あるいは人間と社会の二重の関係規定の間に介在する対応関係を統括する「行為の類比」をさらに「まねびの神学」をもって再解釈した「類比」概念の一つの形態である。なお「まねびの類比 (analogia imitationis)」の用語は筆者による創作である。

*44 1846 年のコルサー事件に逢着して、それまでのキェルケゴールの人間論的な主要概念であった「主体性=真理」概念はさらに社会批判的な視点から展開されて行き、「大衆（多数者）=非真理」概念（本稿の注 36 を参照）と背中合わせとなって、「単独者（少数者）=真理」概念が後期著作活動における中心概念として構想された。「単独者——それはキリスト教的に決定的な範疇であり、キリスト教の未来にとって決定的なものとなる」(SV₁ 13. S.607)。

かえってここでは人間社会における愛の連帯としかしそれと同時に人間社会に対する批判的な関与が、キリストにまねぶ「単独者 (一人のひと)」に要求されている。「古代の隠者とは反対に、単独者であるキリスト者は・・・『この世において、しかしこの世のものとしてではなく』(ヨハ 15,19 を参照) 生きなければならない」(M. M. トウルストルップ)^{*45}。

人間社会における真の平等の人間関係は人間による政治的・社会的な営為からではなくて、まずは「信仰」における卑賤のキリストとの人間の和解的な「一致」の関係規定の類比に基づく愛の連帯の「まねび」の反復として実現されなければならない^{*46}。「信仰」におけるキリストの「苦しみ」の「まねび」は、この世におけるキリストの「愛」の「まねび」を喚起してキリストの「愛」にまねぶキリスト者たちの交わりの形成として結実する^{*47}。キリストと人間の間にあるいは人間と人間の関係に現前する「愛」の「まねび」の類比^{*48}が、「愛」の要請 (愛さなければならない) とその罪過論的な不能

^{*45} Marie Mikulová Thulstrup: The Single Individual. In: *Bibliotheca Kierkegaardiana* 16. København 1988. p.24.

なお M. M. トウルストルップは、「キリストのまねび」における「単独者 (一人のひと)」の社会への批判的な関与 (「矛盾」と愛の連帯 (「一致」) の二重の関係規定を「この世からの決別 (retreat)」と「この世への帰還 (return)」(Marie Mikulová Thulstrup: The Concept of the World. In: *Bibliotheca Kierkegaardiana* 16. p. 145 ff.) として規定している。

^{*46} 「世俗的な平等を完全に可能とすることは不可能である・・・それ (=キリスト教) は全ての相違を存在させるが、永遠の平等を教える」(SV₁ 9. S.73) と、キェルケゴールは人間の政治的・社会的な営為によって実現される「世俗的な平等」から区別して「キリスト教的な平等」の人間関係について語っている (SV₁ 12. S.267 og SV₁ 13. S.589f.)。本稿の注 47 と 48 を参照。

^{*47} ここでの愛の連帯の「まねびの類比」は、キリストの愛の戒め (「わたし (=キリスト) があなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」(ヨハ 15,12b)) における、キリスト (「模範」) とキリスト者たち (「模範」にまねぶ者たち) の「愛」による和解的な「一致」の関係規定の類比に基づくキリスト者たちの「愛」の交わりの形成に準えられる。

^{*48} 「キリスト教的な類似の類似 (lige om lige) は、私 (=キェルケゴール) が全力を尽くしてキリスト教的なものを展開した全ての著作ではなくても一つの著作でもこの思想をもって終えたいと願う程に、重要なそして決定的なキリスト教的な概念である」(SV₁ 9. S.356) と、キェルケゴールは『愛の業』「最終章」の中で「類比」概念をもって人間社会における平等の人間関係を実現する可能性について論及している。

性（愛することができない）の弁証法的な緊張関係の中で、キリストにまねぶキリスト者に真の平等の人間関係における倫理的な実存と行為の可能性（愛することができる）を新しく開示する*49。そして「愛」の「まねび」の類比の刻印されたキリスト者たちの交わりの中で、人間の未来を切り拓く「希望」が胎動する*50。

キリストがキリスト者にとっての「範例」*51 であるように、キリスト者はこの世における、「範例」から類比的な仕方において「派生したキリスト教的な諸範例」（SV₁ 12. S.103）である。そこで「キリストのまねび」における信仰者の新しいキリスト教的な実存と行為は、人間個人の主体的・内面的な実存のあり方だけではなくて*52、さらには市民社会の中での人間の倫理的な行為を基礎付けるものとなる。それゆえに卑賤のキリストにおける「神＝存在（神であること）」と「人＝存在（人であること）」の「一致」の関係（「自同律」と「矛盾」の関係（「矛盾律」）の背反して相応する内的な二重の関係規定から構築される「類比」概念の不可逆的な連鎖についての神学的な解明作業の中に、キリスト教社会倫理学の展開の源泉が伏在しているように思われる。

おわりに

以上のように本稿では、キェルケゴールの後期著作活動の代表作『キリスト教への修練』におけるキリストの「神＝人」関係についての考察から出発して、キェルケゴールの「まねびの神学」の原理と構造を「類比」概念を適用しつつ解明した。そしてキェルケゴールの後期著作活動において提唱された「まねびの神学」を基盤として、これより新しいキリスト教社会倫理学が構想されるであろう。

*49 「真に隣人を愛する者が、絶対的に人間的な平等を表現する」（SV₁ 13. S.597）。

*50 『愛の業』第2部においてキェルケゴールは、キリスト教信仰における「信仰」と「愛」、「希望」（SV₁ 9. S.216ff. og 235ff. I コリ 13,15 を参照）の関係について詳論している。

*51 本稿の注 34 を参照。

*52 本稿の注 41 を参照。

しかし残念ながら紙幅の都合により、本稿ではキェルケゴールにおけるキリスト教社会倫理学の展開の可能性について論及することができない。そこでキェルケゴールにおけるキリスト教社会倫理学の思想内容については、なお残されたキェルケゴール研究の課題として他日また別稿を準備したい*⁵³。

(はちや としひさ)

*⁵³ キェルケゴールにおけるキリスト教社会倫理学の展開の可能性については、すでに以下の拙論において輪郭的に素描してある。八谷俊久「『不安の概念』におけるキェルケゴールの「第二の倫理学」の構想—新しいキリスト教倫理学のためのプロレゴメナ (序説)」『倫理学研究 (第 39 号)』関西倫理学会 2009 年 91 頁以下。